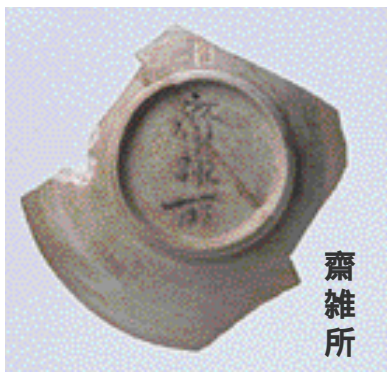


# 齋宮の邸宅

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



齋宮



齋雑所

はじめに 遺跡の性格を知る上で、重要な役割を果たすのが出土した遺物です。京都市立西京商業高校で実施した調査では、墨書土器が特筆すべき発見となりました。

この土器が見つかった遺跡は、北半が主殿の建物と園池、南半がそれに付属する雑舎と考えられる建物群からなる1町規模の邸宅跡です。池の中からは貴重な中国製陶磁器をはじめ、緑釉・灰釉陶器や多くの土器類が出土しました。池北東部では土師器がまとまって見つかり、遺跡の時代(9世紀後半から10世紀中頃)を特定する重要な資料となりました。

**墨書土器** この邸宅の性格を決定づけることになったのが墨書土器でした。「齋宮」「齋雑所」と記された灰釉陶器が数点出土し、伊勢神宮に仕えた齋宮と深く関わる邸宅であった事がわかりました。

齋宮とは伊勢神宮の祭祀を司る齋王が住んでいた居処、あるいは齋王そのものをもさす言葉です。齋王は未婚の皇族女性で、天皇の

即位にともない<sup>ほくじょう</sup>卜定によって選ばれます。選定後すぐに潔斎の生活に入り、宮中の初齋院、宮城外の野宮<sup>のみや</sup>へと場所を移しながら約3年後に伊勢へと赴きます。

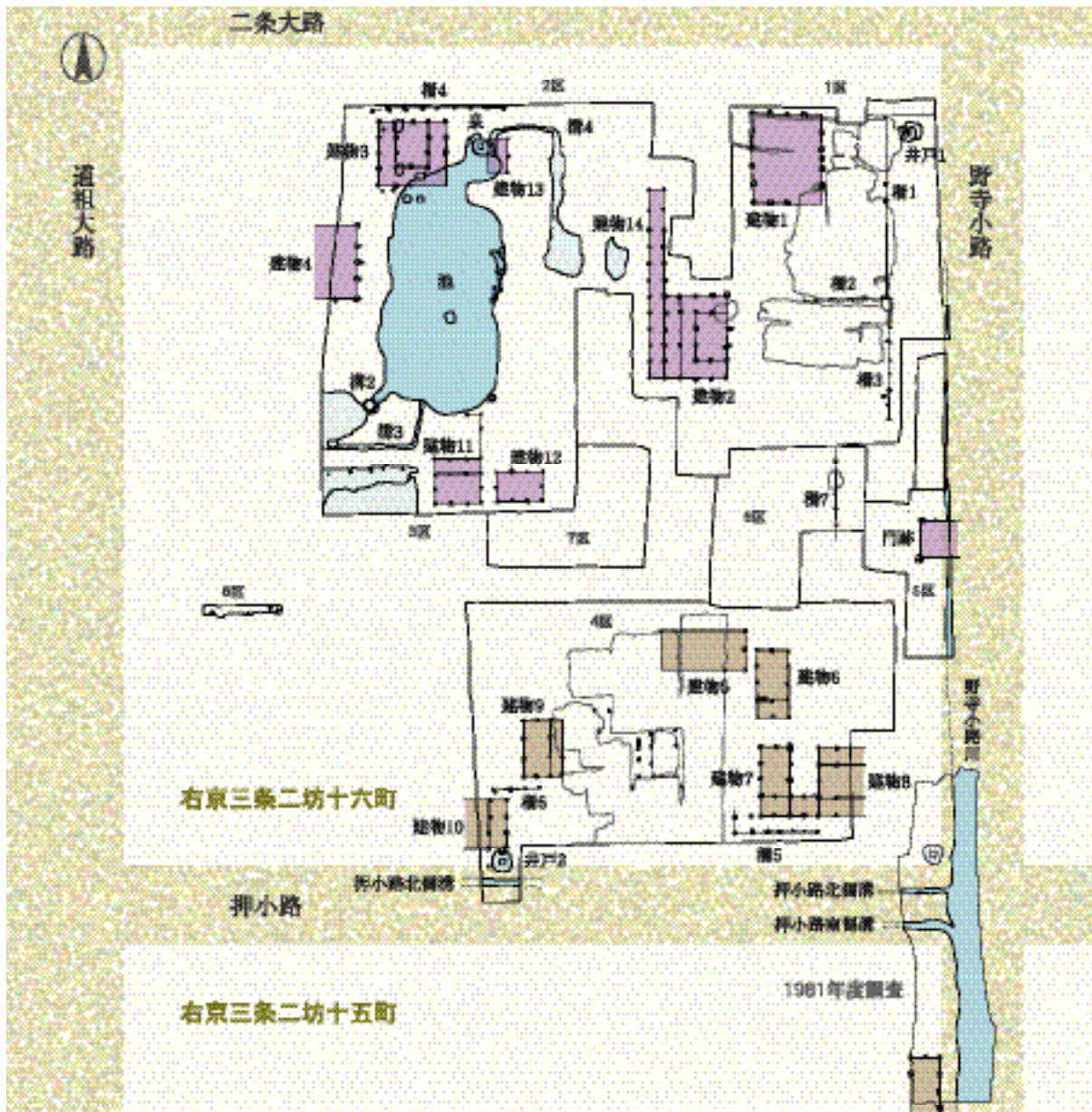
この墨書土器が手がかりとなって、この地が貴族邸宅の全容発見だけにとどまらず、齋宮という皇族に関係する地であったという、平安京で初めての発見につながったのです。

**人形代** この他にも池北端の泉から、女性<sup>ひとかたしろ</sup>の人形代が出土しました。平安京内出土の人形代としては最大級のものであり、祭祀遺物ということから齋宮との関連も注目されるどころです。

**建物と池** 調査地点は、平安京右京三条二坊十六町にほぼ重なります。この地は文献上、誰の所有であったかはわからないのですが、政治の中心であり、天皇の居処でもある平安宮に近接し、1町規模の敷地を持つ邸宅であることから、有力貴族に関連する土地ではないかと考えられます。



人形代(長さ65cm・幅7cm)



9世紀後半から10世紀中頃の調査区周辺(1:1,000)

平安時代の邸宅の様子は、絵巻物などで推測するにとどまっていたのですが、発見された池と建物の関係は、その絵巻物を彷彿とさせるものでした。池は南北に長い形で、その西北には池に張り出すように建物3、池の西側には東岸の景石を眺めるように建物4が建っていました。また建物11・12は、池を挟んで建物3と対峙する位置で、南から池を眺めるかたちで建てられていました。

池から少し離れた東側には、建物1・2が見つかりました。2棟

とも南北棟で、建物2の西側には南北方向の廊下状建物14が連なっていました。建物14からは西側に池を見渡すことができます。敷地南半部にも建物は見つかりましたが、北半部に比べて規模が小さいものでした。

池の深さは約50cmと非常に浅く、水は池北端の泉と中央部の砂礫層の2箇所からの湧き水を利用していたようです。

池に堆積していた土壌を調べると、カエデ・ツツジ・マツなどの植木やアヤメ・シヨウブなどの草

花が植えられていたことがわかってきました。これらの豊富な植生は、当時の庭園の様子を今に伝えています。

おわりに この地に関係する齋王はいったい誰なのでしょう。9世紀後半から10世紀中頃にかけての齋王は十数名もあり、あいにく特定には至っていません。

今後は、遺構の調査結果と出土した遺物をさらに詳しく検討し、平安京における齋宮の暮らしを明らかにしていきたいものです。

(清藤 玲子)